

## 「涅槃を考察する第二十五章」

それに対する反論を斥ける>涅槃を考察する>章の著述を説く> [反論]

ここに言う。

「もし、これら全てが空であるならば、  
起こることは無く、壊れることは無い。  
何を捨て去り、滅すことより、  
涅槃<sup>1</sup>へ至ると主張するのか。 1

ここで世尊が、梵行に従事し、如来の教法に入り、法に完全に一致した法に対する勤勉さを具える者達に、涅槃を二様相に説かれた。蘊<sup>2</sup>の有余と蘊の無余である。

そこで、無明と貪欲等の煩惱の集積を残らず捨て去ったことより、残りの蘊と共にある涅槃であると主張する。そこでここに、我への執着に依拠するので蘊であり、我と名付けられる因である近取の五蘊を『蘊』という言葉で述べた。残余が残るので「余」である。蘊そのものが残余であるので、余りの蘊である。余りの蘊と一緒に留まるので、余りの蘊と共にある（有余）である。それは何かといえば、涅槃である。それも、強盗の集団を残らず殺し村だけが存在することに相似して、有身見<sup>3</sup>等の煩惱の強盗と離れたただの蘊だけが残り、それは蘊の有余の涅槃である。

強盗の集団を残らず殺し、ただの村のみをも破壊したことと相等しく、或る涅槃に蘊のみも有るのではないそれは、余りの蘊の無い（無余）涅槃である。（何

1 涅槃：苦しみが無くなること。また苦しみの源である煩惱が無くなること。

一般に、涅槃には二種あり、煩惱を滅した者が生きている間の涅槃を（その者の心と体の余りが有る）有余涅槃、煩惱を滅した者の死以後の涅槃を（その者の心と体の余りが無い）無余涅槃という。無余涅槃について、仏教小乗学派（説一切有部・経量部）と唯識随教行派（唯識派の一部）は、「無余涅槃を得た時に、その者の有為（心身等、事物としての）本質的継続が断滅され、無くなる」と主張する。唯識正理派・中観派は、無余涅槃を得ても意識の継続はあるとする。

2 蘊：「集積」の意味。輪廻に生まれる時に具わる、物質や知覚・心理作用等の集まり。人間には五蘊が具わる。

五蘊とは色蘊（姿かたちの集積）・受蘊（感受作用の集積）・想蘊（識別作用の集積）・行蘊（人の心と体に属する、他の四蘊以外のものの集積。行動や受・想以外の心理作用等もこれに含まれる。）・識蘊（知覚作用のうち主体となる知覚の集積）の五つ。

3 有身見：自らの五蘊の何れかを捉えることから起こる、「我（私）」と「我所（私のもの）」はその自相として有ると思ひ込む、煩惱となる見解。主な五つの誤った見解（五見）の一つ。

故ならば) これは蘊の余りと離れた故である。

まさしくそれに従って、

『或る者において、身体が壊失し、想が滅した。一切の感受と離れ、行が寂滅し、識（知覚作用）が消え去った。』

や、その如く

『畏怖していない身体によって、受を受け入れるならば、その心は解脱する。灯明が消えた如く。』

と説かれた。それ故に、余りの蘊が無い（無余）涅槃とは、蘊が滅したことより得る。

『その二様相の涅槃が如何様に適うとなるのか?』といえ、仮に諸煩惱と諸蘊が滅したとなれば（適うと）なるのである。しかし、これら一切が空であり僅かにも生は無く、僅かにも滅も無い時、それが滅したことより解脱を得るとなる諸煩惱、あるいは諸蘊が有ると何処でなろうか。

それ故に、諸事物の本性はまさしく有るのである。」と言う。

章の著述を説く > 返答 > [事物が本性として成立した説には涅槃が不合理である]

述べよう。そのように本性を承認するとしても、

もし、この全てが空でないならば、  
起こることは無く、壊れることは無い。  
何を捨て去り、滅したことより、  
涅槃へ至ると主張するのか。 2

それよりそれらが無くなることによって苦しみより超越する（涅槃を得る）となる、本性として尽く留まる諸煩惱と蘊が無くなると、何処でなろうか。（何故ならば）本性において無くなることは無い故である。それ故に、本性と共にあると語る者には、涅槃は不合理そのものである。

そのせいで彼らにとってこの欠陥となる、煩惱が退く性相を持つ、あるいは蘊が退く性相を持つ涅槃を、空性を語る者達が主張するのではない。それ故に空性を語る者達に、まさしくこの論難は当たらない。

返答 > [自説によって涅槃を認識する]

もし、「空性を語る者達が、涅槃は諸蘊か諸煩惱が無くなった性相を持つと主張しなければ、如何なる性相を具えたものを主張するのか?」といえ、

述べる。

捨て去ったこと無く、得ること無く、  
 断滅は無く、恒常は無く、  
 滅は無く、生は無い。  
 それが涅槃であると主張する。 3

貪欲等のように捨て去られたこと無く、善行の果のように得ることが無い。蘊等のように断滅も無いが、何も欠如していないように恒常ではない。本性として滅すこと無く、生じること無く、一切の戲論<sup>4</sup>が寂滅した性相を持つそれが涅槃であると説かれた。それ故に、そのような様相において、それを捨て去ったことによって、それが涅槃となるその煩悩を、『煩悩である』と考えることが何処にあらうか。それが滅したことによってそれを得るとなる蘊を、『蘊である』と考えることも何処にあらうか。これらの分別が起こる限り、涅槃を得たことは有るのではない。(何故ならば)一切の戲論がまさしく尽きたことよりそれ(涅槃)を得る故である。

『仮に、涅槃においては諸煩悩が無く、諸蘊も勿論無いではあろうが、そう見るとしても涅槃の以前には有るのである。それ故に、それらが滅したことは、戲論が尽きたことより涅槃であるとなる。』と思えば。

述べる。この思い込みを捨てたまえ。何故ならば、涅槃の以前に本性として有る諸々は、また無事物にすることはできず、それ故に、涅槃を主張する者はこの考えを捨てたまえ。

「涅槃の果てであるものは、それは輪廻の果てであり、その二つの違いは僅かに、非常に微かにも有るのではない。」<sup>5</sup>

と説かれるであらう。

世尊によっても

「涅槃において諸法(現象)の有性は無い。如何なる法(現象)もそこに無く、それらは永遠にも無い。有と無という分別を具え、そのように行う者達は、苦しみが寂滅することは無い。」

と説かれた故にである。

この偈の意味はこうである。涅槃一余りの蘊が無い(無余)涅槃の界におい

<sup>4</sup> 戲論：チベット語では「放たれたもの」という。二元として現れたもの。認識主体が認識対象を自らとは別ものとして認識する時の対象、又はそのように意識に現れること。「煩悩の戲論」「実在の戲論」「概念作用の戲論」「認識主体と認識対象が二元に現れる戲論」等がある。

<sup>5</sup> 「輪廻……ではない。」：『根本中論』第 25 章 20 偈。

てである。諸法（現象）とは、諸々の煩惱と業と生の性相を持つもの、あるいは諸蘊であり、一切の様相において離れた故に、有そのものは無い。これは一切の対論者が肯定することである。

灯明を消して薄暗い所で、縄を蛇であると認識するように、この涅槃に有るのではないそれらの法（現象）であるものは、永遠に無い。煩惱と業と生の性相を持つそれらの法（現象）は、輪廻の一時的な如何なる時間においても、真如として有るのではない。このように、薄暗い場合に、縄に蛇は自らの本質として有るのではない。（本質として有るならば）存在する蛇のように、薄闇と明りのもとでも認識するとなる故である。

「ならば、如何様に輪廻するのか。」といえ。

述べよう。

「眼障を持つ者達に落髪や蠅、水紋等が映るように、有るのではない本性を持つ諸事物も、我と我所であると、正しくない誤った鬼によって捕えられた幼子達に真実として映るのである。」

と説かれたことは、「有と無という分別を具え、そのように行う者達は、苦しみが寂滅しない。」というのである。

「有る。」と、事物は実在するという分別を具えた伺察派と、自在天派と数論派<sup>6</sup>等の毘婆沙部<sup>7</sup>達に協合する者達と、「無い」という分別を具えた虚無派達と、それより他に、過去と未来の行と、無表色と、心不相応行は無いと語り、それより他は有ると語る者<sup>8</sup>達と、遍計所執性は無いと語り、依他起と円成実の自性は有ると語る者<sup>9</sup>達であり、「そのように有る・無いと語る者達の苦しみー輪廻は、寂滅するとならない。」という。

その如く

「斯くも、毒を食らったかという疑いの想いによって、その毒が腹に入

<sup>6</sup> 伺察派・・・数論派：非仏教徒の学派。順にミーマーンサー学派・ニヤーヤ派・サーンキャ派。実在を基礎とした教義を持つ。

<sup>7</sup> 毘婆沙部：小乗、部派仏教の学派。実在を承認する。

<sup>8</sup> 過去と…語る者：仏教徒経量部。過去と未来の行は現在に存在しないので、概念作用の対象として有るのみなので実質が無く、無表色（表れとしての形色が無い事物。戒律等）と心不相応行（知覚でも形色でもない事物）も、認識できる事物に依拠して名付けられただけの存在なので実質が無い。それより他の事物は直接認識できるので、実質として有るといふ。

<sup>9</sup> 遍計所執・・・語る者：仏教徒唯識派。有無を三自性に分類する。

遍計所執性（全て名付けられたもの。空性以外の恒常）は概念作用の対象として有るのみなのでそれ自体の性相は無く、他の円成実性（空性）と依他起性（他に依拠して起こるもの。事物）はそれ自体の性相、本質があるという。

らなくとも気を失う。その如く、我と我所であると承認する幼子は、その我について正しくない想を考察し、生れて死ぬ。」

とも説かれた。

それ故にそう見るならば、「涅槃において何も捨て去ったことは無いが、何も滅すことは無い。」と知りたまえ。それ故に、一切の分別がまさしく尽きたことが涅槃である。

斯くも『聖宝行王正論』よりも

「涅槃は無事物でもなければ、それが事物であると何処でなろうか。事物と無事物であると捉えることが、尽きたことを涅槃という。」<sup>10</sup>

と説かれた。

返答>それより他の方法で語ることを否定する>涅槃が四つの極辺として成立したことを否定する>涅槃が事物として有る・無いの、それぞれの極辺を主張することを否定する> [涅槃は事物の極辺であるとの主張を否定する]

一切の妄分別が寂滅した本質である涅槃を了解しておらず、涅槃を事物か、無事物か、その双方か、双方ではない本質であると尽く考える、彼らに述べる。

先ず、涅槃は事物ではない。  
老死の性相を持つ背理となる。  
老と死の無い、  
事物は有るのではない。 4

そこで、涅槃を事物であると頭かに思い込む一部の者は、このようにここで、「涅槃とは、煩惱と業と、生の継続に入ることを確実に止めることになる、水の流れを止める堤に似た意味である、事物の我性であり、有るのではない本性の法（現象）が、そのように結果を為すことも見られない。

仮にこれは、『喜の貪欲と一緒にあった愛欲が尽き、貪欲と離れた滅であるものが、涅槃である。』と説かれたのではなかったか。ただ『尽きた』のみでは、事物であるに可でもない。

その如く、『灯明が消えたように、その心は尽く解脱する』と説かれ、『〈灯明が消えたことは事物である。〉ということも不合理である。』といえは。

言う。愛欲が尽きるとは『愛欲が尽きた。』とそのように知るものではない。ならば何かといえば、『涅槃』というその法（現象）が有るならば、愛欲が尽きることになるそれを『愛欲が尽きた。』というのだと知りたまえ。灯明は、単な

<sup>10</sup> 「涅槃は…という。」:『宝行王正論』第 1 章 42 偈。

る例に過ぎない。それについても『それが有れば、心が解脱するとなるのである。』というものであると知りたまえ。」と語る。

そのように、涅槃は尽く留まる事物であるというので、

「先ず、涅槃は事物ではない。」

と阿闍梨龍樹は確かな考察をされた。

それは何故かといえ、何故ならば

「老死の性相を持つ背理となり、」

事物とは老死の性相に間違いの無い故である。「それ故に、それは涅槃そのものにもならない。(何故ならば) 老死の性相を持つものである故である。識の如くである。」というお考えである。老死の性相に間違いのないことを自ら明らかにする為に、

「老と死の無い、事物は有るのではない。」

と説かれ、老死と離れたものは、まさしく事物ではない。(何故ならば) 老死と離れた故に、虚空の花の如くである。

他にも、

もし、涅槃が事物であるならば、

涅槃は有為となる。

有為ではない事物は、

何も、何処にも有るのではない。 5

もし、涅槃が事物であるならば、その時その涅槃は有為となる。(何故ならば) 事物である故に、識の如くである。有為でないものは事物にはならず、例えばロバの角の如くである。

異品遍無性<sup>11</sup>を説く為に、

「有為ではない事物は、何も、何処にも有るのではない。」

と説かれ、「何も」とは能依(依るもの)であり、「内か外の我性である。」という意味である。「何処にも」とは所依(拠りどころ)であり、場所か時間か学説に、である。

他にも、

<sup>11</sup> 異品遍無性：。因三相の一つ。主張命題の述語の反対の意味は全て理由ではないこと。

もし、涅槃が事物であるならば、  
 如何様にその涅槃は依拠したものではないのか。  
 依拠してでない事物は、  
 何も有るのではない。 6

もし、君の説で涅槃が事物であるならば、それは依拠して（成立したもの）  
 であるとなり、「自らの因の集合に依拠してである。」という意味である。その  
 ように、依拠して涅槃を主張するのでもなく、ならば何かといえば、それは「依  
 拠しておらず」である。もし、涅槃が事物であるならば、如何様にその涅槃が  
 依拠してではないとなろうか—依拠しないものであるとは全くなならない。（何故  
 ならば）事物である故に、識等の如くである。異品遍無性を説くのは、

「依拠してでない事物は、何も有るのではない。」

という。

涅槃が事物として有る・無いの、それぞれの極辺を主張することを否定する＞

[無事物の極辺であるとの主張を否定する]

ここで言う。「斯くも説かれた過失である背理となる故に、涅槃は事物でない  
 ということは真実であり、ならば何かといえば、煩惱と生が無くなった故に、  
 涅槃は無事物のみである。」

述べる。これも正理ではない。何故ならば、

もし、涅槃が事物でなければ、  
 無事物が如何様に適うとなろうか。  
 彼にとって涅槃は事物ではない、  
 そこに無事物は有るのではない。 7

もし、涅槃を事物であると主張せず、『涅槃は事物である。』と思い主張しな  
 いならば、その時涅槃が無事物であると如何様に適うとなろうか。『無事物とし  
 てもまさしく適わぬとなる。』というお考えである。

「何故か」といえば。何故ならば、

「彼にとって涅槃は事物ではない。そこに涅槃は有るのではない。」

と説かれ、ここで事物の本性を手放して他に変化したことを「無事物」と呼称  
 するならば、既に示した過失によって、涅槃が事物ではないその説において、  
 涅槃は無事物でもない。（何故ならば）『事物の本性として成立していない本質  
 に、無事物の自性は不合理である故である。』とお考えになられた。

もし、「涅槃とは煩惱と生が無いことである。」といえは。

そう見れば、ならば煩惱と生の無常そのものが涅槃であることになる。何故ならば、煩惱と生が無いことは無常そのものであるが、他ではない。それ故に無常そのものが涅槃であることになるが、それを主張するのでもない。(何故ならば) 勤めが無い背理となる故である。それ故に、それは正しくない。

他にも、

もし、涅槃が事物でなければ、  
 如何様にその涅槃は依拠したものではないのか。  
 依拠したものではない、  
 無事物は有るのではない。 8

そこで、無常そのものが無事物そのものであり、事物に依拠して名付けるのではない<sup>12</sup>。(何故ならば) ロバの角等には無常そのものは認められない故である。性相に依拠して事相が当てはまるが、事相に依拠して性相が当てはまる故に、性相と事相が当てはまることは互いに相対関係するので、事相である事物に相互関係しておらずに無常そのものが有ると、何処でなろうか。それ故に、無事物も依拠して名付けるのである。それ故に、もし涅槃が何らかの無事物であるならば、如何様にその涅槃は「依拠して」ではないとなろうか。それは「依拠して」のみであり、無事物である故に、壞の如くである。まさしくそれを明らかにする為に、

「依拠したものではない、無事物は有るのではない。」  
 と説かれた。

「もし、依拠しておらず無事物が有るのでなければ、ならばここで、何に依拠して石女の子等は無事物となるのか。」といえは。

「石女の子等は無事物である。」と、誰がそう言ったのか。このように、

「もし、事物が成立していなければ、無事物が成立するとはならない。

事物が他に变化したものが、無事物であると、人は言う。」<sup>13</sup>

と、先に既に説いた。それ故に、石女の子等は無事物そのものではない。

また何処かで

<sup>12</sup> 名付けるのではない。: 北京版・ナルタン版では「名付けるのである。」

<sup>13</sup> 「もし、…言う。」: 『根本中論』第 15 章 5 偈。



「虚空や兎の角や、石女の子等も、無いながら言葉として述べられたように、事物についての分別もその如くである」

と説かれたそれにおいても、「事物であるとの分別を否定しただけのことであるが、無事物であると分別したのではない。(何故ならば) 事物そのものが成立していない故である。」と知りたまえ。「石女の子」というこれは、言葉のみものに尽きるが、事物か無事物そのものとなる、この何らかの意味は認められていない。それ故に、認められることの無い本性において、事物や無事物であると分別されると何処で正しいとなろうか。それ故に、「石女の子は無事物ではない。」と知りたまえ。

それ故に、

「依拠してではない、無事物は有るのではない。」

というこの説は留まる。

涅槃が事物として有る・無いの、それぞれの極辺を主張することを否定する>

[二極辺を捨て去った涅槃を何処におくか]

「ここでもし、涅槃は事物ではなく無事物でもなければ、ならば涅槃とは何であるか。」といえ。

述べる。ここで世尊、如来方が、

来て、行く事物は、

依拠したか、因を為したものである。

それは依拠したのではなく、因を為してではない。

涅槃であると示された。 9

そこで「来て、行く事物」とは、来て、行く事物—「生死が一つ一つ連なる」という主旨である。その、来て行く事物も、時折「因と縁の集合に依拠して有る。」と名付ける。長短の如くである。時折は、因であるとして名付ける。灯明の光の如くである。

仮にここで、因であるとして名付けるか、「依拠して生じる。」と設立しようとも構わないが、一切の様相において、その生と死の継続に依拠していないか、因を為したのではなく、(輪廻に) 入らないものが涅槃であるとされる。入らないだけのことは、「事物である。」とも「無事物である。」とも考察されることもできず、そのようであれば、涅槃とは事物でも無事物でもない。

あるいは「行が輪廻である」という者達の説である、それらのようであれば、

依拠しつつ、依拠して生じ壊れるものが、依拠したのではなく（輪廻に）入らぬことを「涅槃」と述べる。

または或る者のようであれば、その去来する事物であるその近取（蘊）と、それに依拠しての者（プトガラ）である<sup>14</sup>、それらの恒常と無常そのものとして述べられない輪廻であるプトガラは、因を為して（輪廻に）入るのである。しかし因を為しながら、因を為して（輪廻に）入るもの自体が、現在において因を為したのではなく（輪廻に）入らぬことを「涅槃」と呼称する。

諸行とプトガラの単なる（輪廻への）不入は、「事物である」か「無事物である。」と考察され得るものでもない。

それ故にも、「涅槃は事物とも無事物としても正しくない。」という。

涅槃が事物として有る・無いの、それぞれの極辺を主張することを否定する＞ [二極辺の見解を教示者が叱責する方法]

他にも、

諸々の起や壊を、  
捨て去るよう教示者が御言葉を賜れた。  
それ故に、涅槃とは  
事物でなく、無事物でないと正しい。 10

そこで経典より、

「比丘達よ。起か壊によって有（輪廻）よりの出離を探求する者達は、それらによって酷く、遍く知らぬのである。」

と説かれた。起への愛欲と、壊への愛欲は、二つとも尽く捨て去られるべきものであるが、涅槃はそのように、世尊が捨て去られるものであるとは説かれていない。ならば何かといえば、「捨て去られるものではない」としてである。

それ故に、もし涅槃が事物の本性を持つものか、無事物の本性であるとなれば、それも捨て去られるもののみとなるけれど、捨て去られるものでもない。それ故に、涅槃は事物ではなく無事物でもないとするに適正である。

涅槃が四つの極辺として成立したことを否定する＞ [その二つの極辺を主張することを否定する]

或る者のようであれば、「煩惱と生の二つはそこに無いので、涅槃は無事物の本性であるが、自体が事物の本質であるので事物の本性である。」と、双方とも本性であり、「それら二つの本性を持つ涅槃も不合理である。」と示す為に説かれた。

<sup>14</sup> それの、・・・である：北京版・ナルタン版を元にして訳した。  
ゴマン版「その去来する事物無く、その近取（蘊）と・・・」

もし、涅槃が、  
事物と無事物の双方であるならば、  
事物と無事物であるものが、  
解脱となるが、それは正理ではない。 11

もし涅槃が事物と無事物双方とも本性であるとなれば、その時、事物と無事物として解脱するとなるだろう。それ故に、諸行の我性を得ることと、それと離れたことそのものが解脱となるけれど、諸行は「解脱」というに正しくもない。まさしくそれ故に「それは正理ではない。」と説かれた。

他にも、

もし、涅槃が、  
事物と無事物の双方であるならば、  
涅槃は依拠していないのではない。  
その二つは依拠してである故である。 12

もし、涅槃が事物と無事物の本性であるならば、その時、因と縁の集合に依拠し、相互関係して（成立したの）であるが、依拠しておらずに（成立したの）ではない。何故かといえば、何故ならば

「その二つは依拠してである故である。」

一事物に依拠して無事物であり、無事物に依拠して事物は有る故に、事物と無事物の双方とも依拠してであるが、依拠していないのではない。涅槃は事物と無事物の本性である故に、そのようになる筈であるが、それはそのようでもない。それ故に、これは正しくない。

他にも、

如何様に涅槃が、  
事物と無事物の双方であろうか。  
涅槃は無為であり、  
事物と無事物は有為である。 13

事物とは、自らの因と縁の集合より起こった故に有為であるが、無事物も事物に依拠して起こる故と、

「生の縁によって老死」

と現れる故に、有為である。それ故に、もし涅槃が事物と無事物の本性であるならば、その時それは無為ではない<sup>15</sup>が有為そのものとなるけれど、有為であると主張するのでもない。それ故に、涅槃が事物と無事物であるとは正しくない。

もしまた、『涅槃とは事物と無事物の本性ではなく、ならば何かといえば、涅槃にそれらの事物と無事物が有るのである。』と思えば、

それも正しくない。「何（の根拠）より」といえば、何故ならば、

如何様に涅槃に、  
事物と無事物の二つが有ろうか。

互いに反するものである事物と無事物も、一つの涅槃に有るのではない。それ故に

『〈如何様に涅槃に、事物と無事物の二つが有ろうか〉  
まさしく有るのではない。』とお考えになられた。如何様にといえば、

その二つは一つに有るのではなく、  
光と闇の如くである。 14

斯くも、一つの家屋に同一時に、互いに反するので、光と闇が有るのではないが如く、その二つも涅槃に有るのではない。

涅槃が四つの極辺として成立したことを否定する > [双方でない極辺を主張することを否定する]

ここで、涅槃は事物ではなく無事物でもないことも、如何様に正理ではないかを示す為に、

事物でなく無事物でないものを、  
涅槃であると示すものは、  
無事物と事物の二つが  
成立したならば、それは成立するとなる。 15

と説かれ、もし「事物」という何かが有るならば、その時それを否定した面より「事物ではない涅槃」というこの考えとなる。もし何か無事物が有るならば、その時それを否定したことによって、涅槃は無事物ではないとなるものである

<sup>15</sup> 無為ではない：北京版・ナルタン版を元にして訳した。ゴマン版「無為である」

が、事物と無事物そのものが有るのではない時、それらを否定したのも有るのではない。それ故に、『涅槃は事物ではなく無事物でもない。』と思うその分別も不合理なので、これは正理ではない。

他にも、

もし、涅槃が、  
事物でなく無事物でなければ、  
「事物でなく無事物でない」と、  
何ものがそれを頭かにするのか。 16

もし、『涅槃は事物ではなく、無事物でもない本性として有る。』と考えるならば。

ここで何ものが、「そのような様相となった双方の本質ではないその涅槃が有る。」と、頭かにしようか—認識する、あるいは明らかにしようか。

その涅槃にそのような様相の、何らかの了解者が有るのか？あるいは無いのか？

もし有るならば、そのようであれば涅槃においても我が有ることになるが、それを主張するのではない。(何故ならば) 近取無く、我はまさしく有るのではない故である。

もし無ければ、その時そのような様相の涅槃が有ると、何が決定するのか。

もし「輪廻に留まる者が肯定するのだ。」といえは。

輪廻に留まる者が肯定するならば、それは(意)識が決定するのか？あるいは智慧によってであるのか？と問えば、仮に(意)識によってであると考えれば、それは正しくない。何故かといえは、このように、この識は様相を対象とするのである。涅槃においては、僅かな様相も有るのではなく、それ故に、先ずそれは(意)識が対象とするのではない。智慧が決定するのでもなく、智慧は空性を対象としなければならないが、それも生じていない本性そのものであるので、如何様に有るのではないその本性によって「事物ではなく、無事物ではない涅槃」と捉えるのか。智慧とは一切の戯論(二元的な意識と対象)より超越した本性である故である。

それ故に、涅槃は何ものも「事物ではなく、無事物ではない。」と頭かにしないが、頭かにされておらず、明らかにされていない、認識されていないそれは、

「そのように有る。」ということは正しくない。

それより他の方法で語ることを否定する> [涅槃を会得したものが四つの極辺として成立していないと示す]

斯様に「涅槃においてこれらの四分別が一切の様相においてあり得ないが如く、涅槃の会得者である如来についてもこれらの分別はあり得るのではない。」と示す為に、

世尊は涅槃を得てから、  
「有る」と顕かではない。その如く、  
「無い。」あるいは「双方」か、  
「双方ではない」とも顕かではない。 17

と説かれ、このように

「如来は有ると、密な思い込みで捉えた者。彼は、涅槃について、『無い』という分別で考える。」<sup>16</sup>

と先に既に説いた。そのようであれば、先ず、如来は涅槃を得て以降「有る。」あるいは「無い。」と顕かではない。この二つが無いので、「双方である。」とも顕かではない。双方ともがまさしく無いことによって「双方ではない」とも顕かではなく、そう捉えないのである。

世尊は涅槃を得て以降、四様相として顕かでないだけではない。他にも、

世尊は留まられたとしても、  
「有る」と顕かではない。その如く、  
「無い。」あるいは「双方」か、  
「双方ではない」とも顕かではない。 18

如何様に顕かでないかは「如来を考察する」<sup>17</sup>においてまさしく既に示した。

それより他の方法で語ることを否定する>それによって成立した意味> [輪廻と寂滅が平等性であると成立した]

まさしくそれ故に、

輪廻は涅槃より、  
違いは僅かにも有るのではない。

<sup>16</sup> 「如来は…考える」：『根本中論』第 22 章 13 偈。

<sup>17</sup> 「如来を考察する」：『根本中論』第 22 章。

涅槃も輪廻より、  
違いは僅かにも有るのではない。 19

何故ならば、世尊が留まられたとしても「有る。」等と頭かではないが、涅槃を得られたとしても「有る。」等と頭かでないまさしくそれ故に、輪廻と涅槃の二つにおいて互いの違いは何も有るのではない。尽く分析したならば、本性は等しい故である。

何であるとしても世尊がこのように、

「比丘達よ。生と老死の輪廻は、始まりと終わりが無い。」

と説かれたことも、まさしくこれ故に合理である。輪廻と涅槃の二つに違いが無い故である。

このように、

涅槃の果てであるものは、  
それは輪廻の果てであり、  
その二つの僅かな違いは、  
非常に微かにも有るのではない。 20

それによって成立した意味> [無記の見解の否定が成立した]

涅槃と輪廻に違いは無い故に、前と後の果てについての考察（の対象）は有るのではないのみに尽きず、

御方が逝かれて以降、果て等や、  
恒常である等の緒見解は、  
涅槃と、後の果てと、  
前の果てに依拠したのである。 21

それらもまさしくそれ故に不合理である。（何故ならば）輪廻と涅槃のその二つともも、本性として寂靜そのものとして、一味である故である。

そこで、「逝かれて以降」という非常に象徴したこの言葉によって、四見解を認めた。

このように「如来が亡くなられた以降有る」と、「如来が亡くなられた以降無い」と、「如来が亡くなられた以降、有ることも有るが、無いことも無い」と、「如来が亡くなられた以降、有るのでもなく無いのでもない。」というものであり、これらの四見解は、涅槃を最高に（実在として）捉えることに入った。

果て等も四見解がある。このように「世間は果てを具える。」「世間は果てを

具えない。」「世間は果てを具えるのでもあるが、果てを具えないのでもある。」「果てを具えるのでもないが、果てを具えないのでもない。」というもので、これらの四見解は後の果てに依拠して入るのである。

そこで、我と世間について未来の生（来世）が見られないので「世間は果てを具える。」とそのように考えることは、後の果てに依拠して入るとなる。その如く、未来の生を見るので「世間は果てを具えない。」と入り、見て見ないことによつて「双方である」と考えるとなるが、双方を否定したことによつて「果てを具えるのでもなく、果てを具えないのでもない。」と考えることになる。

「世間は恒常である。」「世間は無常である。」「世間は恒常も恒常であるが、無常も無常である。」「恒常でもなく、無常でもない。」というこれら四見解は、前の果てに依拠して起こるのである。

そこで、我と世間において、過去に生を見ることによつて『世間は恒常である。』と思ひ悟るとなるが、見ないことによつて『無常である。』と思ひ悟ることになる。見ることと見ないことによつて『恒常も恒常であるが、無常も無常である。』と思ひ悟るとなるが、見るのでもなく見ないのでもないことによつて『恒常でもなく、無常でもない。』と思ひ悟るとなる。

「これらの見解が如何様に適うとならうか。」といへば。

もしある事物に幾らかの本性があるならば、それを事物や無事物であると考察したことによつてこれらの見解が有るとなるものであるが、輪廻と涅槃の二つに違いが無いと示された時、

一切の事物が空であることにおいて、  
 果てが有るとは何か。果てが無いとは何か。  
 果てと果て無しとは何か。  
 果てと果て無しでないとは何か。 22  
 そのものとは何か。他とは何か。  
 恒常とは何か。無常とは何か。  
 恒常と無常の双方とは何か。  
 双方でないも、何ものであるか。 23

無記であるこれら十四の事物も、事物自らの本質が無ければ、まさしく正理ではない。

「事物自らの本質を捏造して、それと離れたことと離れていないことよりこれらの見解が生じさせられて、顕かに執する者のこの執着が、涅槃の都へと行



く道を塞ぎ、輪廻の諸々の苦しみに繋げるのである。」と知りたまえ。

返答> [そのように否定したことにおいて、経証との矛盾を排斥する]

ここで言う。「もし、そのように君が涅槃も否定したならば、そのようであれば、有情の蘊の果てしない受用に従って、衆生の思いの本性を誤りなく御理解され、大慈悲に突き動かされた世尊が、世間の苦しみからの超越を得させる為に、受用の対治としてそれに適合した法を示されたことは無意味となる。」

述べよう。もし、「法」という何か、あるいはその法の聴聞者である何らかの有情、あるいは「仏陀世尊」という何らかの教示者が有るならば、その時これはそのようになろうが、斯くも、

一切の認識対象が寂滅し、  
 戲論が寂滅し、寂靜であり、  
 仏陀は、何処においても、  
 誰にも、如何なる法も示していない。 24

説かれていない時、我々に斯様に言及された過失である背理と、何処でなろうか。

ここで、戲論—諸々の様相であるものが寂滅する—（それに）入らないことが涅槃であるが、寂滅そのものが寂靜である。（何故ならば）本性として寂滅する故である。

あるいは、言葉が入らぬので「戲論が寂滅した」のであり、心が入らぬので「寂靜」である。

あるいは、諸煩惱が起らないので「戲論が寂滅した」のであるが、生が起らぬので「寂靜」である。

あるいは、煩惱を捨て去ったので「戲論が寂滅した」のであるが、薫習を残らず捨て去ったので「寂靜」である。

あるいは、所知が認識されていないので「戲論が寂滅した」のであるが、知覚が認識されていないので「寂靜」である。

そのように、「仏陀世尊方は、空に雁の王達が自らの翼を羽ばたかせた風に乗り留まるように、あるいは虚空はまさしく何ものでもない故に風が空に留まるように、一切の戲論が寂滅し、寂靜の本質である涅槃に、留まらぬあり方によって留まる時、一切の様相は尽く認識されていない故に、何処でも構わぬが一天界、あるいは人界等において、天や人の誰にも、全くの煩惱か、清浄な法を何も示されていない。」と知りたまえ。

斯くも『如来秘密経』<sup>18</sup>より、

「寂慧よ。或る晩に如来が、無上の正しく完成した菩提を顕かに完全に達成（成仏）され、或る晩に取る事無く完全に涅槃を得たとなるまで、如来は、延いては一文字であろうとも説かれていない。説かれるともならぬ。」

と説かれた。

その如く、

「一切は言葉なく文字は無い。原初より寂静であり汚れ無く空である。諸法（現象）をそのように知る者、それは若者であると仏陀は述べられた。」

と説かれた。

「もし、そのように仏陀が、何処においても、誰に対しても、如何なる法も示していないならば、ならば如何様にそれら非常に様々な善説の用語が顕現するのか。」といえは。

述べよう。「この世尊が、我々にこれらの法を示された。」というこれは、無明の眠りを具え、夢を見ている身体を持つ者達の、自らの分別より起こったのである。

斯くも世尊が

「無漏の如来の、善なる法の映像のようなものである。真如と如来は無い。一切の世間が映像を見ている。」

と説かれた如くである。

その如く、これは「如来の秘密を示した章」より詳細に説かれたのであり、それ故に、涅槃の為に法を示されたことは無いので、「法の教示がある故に、涅槃はまさしく有る」と何処でなろうか。それ故に、「涅槃も無い。」ということが成立した。

涅槃を考察する > [了義の教証と合わせる]

世尊によっても

「涅槃が無いことが涅槃であると、世間の守護者が示された。虚空の結び目が解けるとは、虚空そのものが解いたのである。」

と、説かれたのである。

その如く、

「世尊よ。何らかの法（現象）が生じるか滅すと探求する者達において

<sup>18</sup> 『如来秘密経』： de bzhin gshegs pa'i gsung ba'I mdo

は、仏陀が現れることはありません。世尊よ。輪廻を事物として探求する者達は、輪廻より超越することはありません。

それは何の為かといえば、世尊よ。『涅槃を得る』ということは、一切の様相が尽く寂滅し、一切の分別（概念作用）が滅したことでありますが、世尊よ。善良に説かれた法である律において出家をして、非仏教徒の見解に落ちた彼ら愚かな者達は、このように、胡麻より胡麻油や、乳より新しいバターを得るように、涅槃を事物より探求する。世尊よ。『非常に苦しみより超越した一切法（現象）において涅槃を探求する、顕かな慢を持つ者達は、非仏教徒である。』と私は説きます。

世尊よ。正しく入道した瑜伽行者は、如何なる法（現象）も生じる、あるいは滅すとはせず、如何なる法（現象）であろうとも得たり、あるいは直覚として悟ろうと探求しません。」

と詳細に説かれた。

涅槃を考察する > [章の名を示す]

阿闍梨月称の御口より綴られた頭句より、「涅槃を考察する」という第二十五章の解説である。

DECHEN 訳